森里海連環学に基づく東北復興のための
第 4 回京都大学学生ボランティア事業報告書

（平成 25 年 3 月 17 日～22 日）

京　都　大　学

目　　次

１．第４回学生ボランティアの派遣について……2
２．先遣隊派遣……3
３．参加者……4
４．ボランティア参加学生による学生交流会企画書……6
５．ボランティア活動内容……8
６．参加学生による活動報告……11
（１）はじめに……11
（２）各班からの報告（活動内容報告・よかった点・反省点など）……11
（２－１）教育支援班……11
（２－２）新企画班……13
（２－３）フィールドワーク班……13
（２－４）研究班……16
（３）次回以降に向けたその他の課題・提案……18
（４）まとめ……22
７．今後のボランティア活動に関する課題、留意点（フィールド研）……23
８．記録……25
（１）記録写真・聞き取り内容・参加学生の声……25
（１－１）記録写真……25
（１－２）聞き取り内容（抜粋）……29
（１－３）参加学生の声（抜粋）……29
（２）第４回学生ボランティア派遣の応募チラシ……31
（３）事後報告会の告知について……32
９．特記事項（放射能測定の結果など）……32
１０．謝辞……32

１．第 4 回学生ボランティアの派遣について

京都大学は、2013 年 3 月 17 日（日）から 3 月 22 日（金）の間、ホームページで公募した学生 28 名と教員 2 名、事務職員 2 名、技術職員 1 名を宮城県気仙沼市の宮城県気仙沼高校および同市西舞根地区の水山養殖場、同市長磯船原の気仙沼復興協会、岩手県陸前高田市気仙町の陸前高田市復興サポートステーションに派遣し、東北復興支援ボランティアを展開した。

ボランティア参加学生募集は 2013 年 1 月 7 日から 11 日までインターネットを通じて行った。また、募集に先立つ 2012 年 12 月 10 日および 18 日に第 3 回ボランティア参加者有志によるボランティア事前説明会が開催された。第 2・3 回に派遣された学生の一部が気仙沼高校との交流会を学生独自で企画し、前もって高校との情報交換を行っており、その経験談が伝えられた他、第 4 回への継続企画が提案され、これに対する積極的な協力が第 4 回参加学生にも要請された。さらに事前調査のため、2 月 26 日から 28 日にかけて、職員 2 名が学生 2 名を引率して現地の状況や受け入れ態勢を確認した。

復興が進みつつある被災地では、労働ボランティア活動への需要は減少傾向にある。水山養殖場でもカキやホタテの養殖が順調に回復しつつあり、養殖カキの生産量は宮城県下で第一位となった。今回はそのことを踏まえ、水山養殖場での活動を 1 日に限り、教育支援や現在増えつつある農業支援といった大学の特徴を生かしたボランティア活動を中心においた。

今回の活動も、前回同様、学生諸氏はしっかりと自己管理を行い、病気にかかったり怪我を負う者は一人もなかったことは幸いであった。また、京都大学生として恥ずべき行動もなかったことは、学生諸氏の真摯な活動の結果である。

なお、5 月 15 日（水）にフィールド科学教育研究センター第 1 会議室において今回のボランティア活動の報告が参加学生により行われた。

第 4 回京都大学学生ボランティア引率者代表

フィールド科学教育研究センター　教授　徳地直子

２．先遣隊派遣

第 4 回ボランティア事業を行う前に、現地の状況や受け入れ態勢を確認するために先遣隊を 2 月 26 日より 28 日にかけて、森里海連環学教育ユニットの横山壽准教授と本部リスク管理課の大槻博也掛員が農学部 3 回生の内海真弓と教育学部 2 回生の小貝七海を引率して、現地を訪問、諸団体と競技を行った。その行程は以下のとおりである。

2 月 26 日
7：06　京都発新幹線乗車、12:13 一ノ関着。13:00 レンタカーで気仙沼高校へ向けて出発。
14:30　気仙沼高校着。気仙沼高校にてあいさつ、ボランティア内容協議。
16:00　気仙沼市復興協会にてボランティア内容協議。協会員の案内で気仙沼市沿岸部の被災状況を視察後、気仙沼市内泊。

2 月 27 日
9:00　水山養殖場にてあいさつ、ボランティア内容協議。
14:00、唐桑地区 NPO/NGO 連絡会の集会に参加。
16:00　気仙沼市内の被災状況を視察後、仙台泊。

2 月 28 日
帰学。

３．参加者

労働ボランティア（25 名）

氏名	学部／研究科	学科／専攻	回生
今津　敬済	工学部	物理工学科	2
今任 英信	総合人間学部		2
岩﨑 健太	農学研究科	地域環境科学	M2
大嶋 恵里	農学部	食料環境経済	1
小貝 七海	教育学部		2
奥村 学	農学部	森林科学	2
音石　遼	総合人間学部		3
梶原 駿	教育学部		1
片畑　剛志	理学部		2
門脇 麻友	薬学部	薬学科	2
川西 理史	工学部	地球工学	3
木田 龍祐	農学部	資源生物科学	3
鬼頭 舞	文学部		1
桐生 志保	生命科学研究科		M2
後藤田 涼希	農学部	森林科学	2
高比良 健太郎	経済学部		1
谷崎　佑磨	法学部		2
ドゥアンラット	経済学部		4
中江　文人	文学部		4
中元　友加里	文学部		3
林 明香里	文学部		2
宮﨑 俊亨	経済学部		3
森口 遥平	文学部		1
横光 明子	法学部		1
渡邉 勇太	農学研究科	森林科学	M1

研究ボランティア（3 名）

氏名	学部／研究科	学科／専攻	回生
内海　真弓	農学部	森林科学	3
岡﨑　裕	経済学部		3
藤馬　裕一	農学研究科	森林科学	M2

引率(5 名)

氏名	所属・職名
徳地　直子	フィールド科学教育研究センター教授
横山　壽	学際融合教育研究推進センター特定准教授
牛田　俊夫	農学研究科等総務課課長補佐
吉田　廉	総務部リスク管理課課長補佐
境　慎二朗	フィールド科学教育研究センター技術専門職員

４．ボランティア参加学生による学生交流会企画書

2013年3月13日
第4回東北地方復興支援学生ボランティア

1．企画背景について
　京都大学は、一昨年の東日本大震災を受け、気仙沼を含む東北地方の復興に貢献するために、長期的にボランティア活動を行うことを計画している。今回はその４回目にあたり、前回および前々回においても気仙沼高校において交流会を行ってきたが、気仙沼高校の生徒の皆様と京大学生ボランティアの交流をより継続的なものにするために、今回の交流会を行う。

2．企画目的について
　前回の交流会同様、気仙沼高等学校の生徒に対し、ボランティアに参加する学生が、自身の高校生活および大学生活の経験を様々な手段で伝えることにより、生徒のこれからの学習計画や将来の目標を考える上での参考としてもらう。また、京大学生ボランティアと気仙沼高等学校生徒とが今後も継続的に交流していくために、どのようにすればよいかについて話し合う。

3．日時および対象
日時：2013年3月18日（月）13:30～17:00
場所：宮城県気仙沼高等学校校舎内
対象：気仙沼高等学校新2・3年生
ボランティア参加学生：28名
（所属：法学部、文学部、経済学部、教育学部、総合人間学部、農学部、理学部、工学部、薬学部、生命科学研究科、農学研究科）

4．企画内容について
〈スケジュール〉
13:30～14:00 ポスター発表
14:05～14:35 座談会1回目
14:40～15:10 座談会2回目
15:20～16:20 ボランティア参加者数名が別室に移動し、生徒会・ボランティアクラブとのミーティングを行う。残りは座談会の続きを行う（時間は生徒会・ボランティアクラブの顧問の先生と相談して変更する可能性もある）。
16:20～17:00 片づけ

〈必要となる部屋〉
・大講義室
　大講義室内に、ポスターを展示するスペースと、座談会会場を設ける。座談会会場は新2年生向けのスペースと新3年生向けのスペースに分ける。
・生徒会・ボランティアクラブの生徒とミーティングを行うための部屋

〈内容〉
① ポスター発表
　大講義室において、ボランティア参加の学生が大学での学習・研究内容やサークル・部活動の経験、大学生活の実情などをテーマに作成したポスターを掲示し、興味のある生徒に対して

発表を行う。なお、ポスターの大きさはA1版程度とする。
②座談会
　ポスター発表終了後、大講義室内に設置した座談会会場において、ボランティア参加の学生が、フリートークという形式で気仙沼高校生徒からの質問に答える。
※座談会会場は新2年生向けのスペースと新3年生向けのスペースに分け、座談会の1回目と2回目でボランティア参加の学生が入れ替わる。
※お茶菓子を用意するなどして気軽に話してもらえるような環境づくりにも努め、できるだけ多様な質問や相談に応じるようにする。
※ポスターを見た方が伝わりやすいと思われた時には、ポスターを展示している場所に生徒を誘導し、ポスターを示しながら話すようにする。

③生徒会あるいはボランティアクラブの生徒との交流
　今後、どのように気仙沼高校の生徒と京大学生ボランティアが交流を続けていくかについて話し合う。議題については今後、生徒会・ボランティアクラブの生徒と連絡を取り、決める。

〈必要となる機材〉
ポスター展示用のパネル（30枚程度）

5. 企画実施後の対応
・生徒、先生方を対象に事後アンケートを実施することにより、次回以降のボランティアを行う上での改善点を見出す。
・気仙沼高等学校と継続的に連絡を取り、ボランティアへの新たな要望を把握する。
・京都大学内あるいは学外におけるボランティア報告会に積極的に参加する。

５．ボランティア活動内容

17 日(日)　労働ボランティア・研究ボランティア　共通

6：30	時計台集合
7：00	大型バスで出発
19:00 頃	一ノ関駅西口乗車組（2 名）と合流
21:00 過ぎ～	国民宿舎 到着、夕食（お弁当)、ミーティング
22:00～	入浴、打ち合わせ、準備（教育支援ポスター・自己紹介カード 作成)
23:00 頃	就寝

18 日(月)　労働ボランティア

7:00 ～8:00	朝食
8:30 ～9：30 頃	唐桑半島ビジターセンター･津波体験館　見学
9：50 頃	からくわ荘 発　(大型バス)
11：00～	昼食 ＠お魚いちば
12：15	お魚いちば 発
12：30 頃	気仙沼高校 着、教育支援準備開始
13：30 ～14：00	ポスター発表
14：00 ～17：00	座談会
(15：20 ～16：20	別室で生徒会、ボランティアクラブとミーティング)
17：00 ～18：00	片付け、完全撤退
18：50	宿舎到着
19:00 ～	夕食、ミーティング
20:00 頃～	入浴、翌日の作業についての打ち合わせ 等
22:00 頃	就寝

18 日（月）研究ボランティア

8:30	からくわ荘をレンタカー①で出発
9:00	民宿「船渡」にて会議（午前中、横山先生は 10:30 レン タカーで船渡を出てお魚広場へ、 労働ボランティアと合流、気仙沼高校で挨拶後、境技術専門職員を市内レンタカー会社に送った後、水山養殖場へ)、学生 3 名は「船渡」から直接水山養殖場 へ向かい、移動の間に弁当を購入。
16:30	水山養殖場 発
17:00	からくわ荘 着
19:00 ～	夕食、ミーティング
20:00 頃～	入浴、翌日の作業について打ち合わせ 等
22:00 頃	就寝

19 日(火)　労働ボランティア

6:00 ～7:00	朝食
7:15	宿舎出発　(中型バス、レンタカー②)
8: 30～	気仙沼復興協会（KRA）到着、受付、説明 、移動 など
9:30 頃～	労働ボランティア全員での農地復旧作業 （レンタカー②で、トイレのある体育館へ繰返し往復運転)

12:00~13:00　　昼休み（気仙沼復興協会（KRA)介して発注しておいたお弁当）
14：30 頃～　　作業終了、報告、後片づけ（作業現場・KRA）
15：30 ～16:30　　周辺地域の散策など（KRA の方による案内・説明の聞き取りも含む）
17:00 過ぎ　　宿舎到着
（レンタカー②で事務職員交替のため気仙沼駅へ、牛田課長補佐 17:43 着、吉田補佐 17：51 発）
18:30～　　夕食・ミーティング
20:00～　　入浴・反省・打ち合わせなど
22:00 頃　　就寝

19 日（火）研究ボランティア
8:00　　からくわ荘をレンタカー②で出発。途中、弁当購入
8:30　　水山養殖場着、午前中機器のメインティナス作業。 午後、湿地にて底質、生物調査
16:30　　水山養殖場 発
17:00　　からくわ荘 着
18:30～　　夕食・ミーティング
20:00～　　入浴・反省・打ち合わせなど
22:00 頃　　就寝

20 日(水（祝))　労働ボランティア
7:00 ～8:00　　朝食
8:30　　宿舎出発（マイクロバス）
9:00～　　水山養殖場 到着、牡蠣養殖の補助作業
12:00～13:00　　昼休み（お弁当）＠水山養殖場の集会所
13:00～14:30 頃　　水山養殖場代表者の畠山重篤氏による講演、取れたてのホタテ貝をご馳走になる
14:30 頃　　水山養殖場　出発
15:00～16:30 頃　　折石海岸の散策、買い出し作業
17 :00 頃　　宿舎到着
19:00～　　夕食・ ミーティング
20:00～　　入浴・打ち合わせ 等
20:30～　　「反省会」と「お疲れ会」
24:00～　　各自 就寝

20 日（水（祝））　研究ボランティア
8:00　　からくわ荘をレンタカー②で出発
8:30　　水山養殖場着、湿地にて底質と生物の調査
11:00 頃　　作業終了、労働ボランティアと合流
12:00～13:00　　昼休み（お弁当）＠水山養殖場の集会所
（横山教員 13:00 境職員 運転のレンタカー①で一ノ関駅へ、14:48 発やまびこ 60 号乗車、徳地教員 15:14 着）
13:00～14:30 頃　　水山養殖場代表者の畠山重篤氏による講演、取れたてのホタテ貝をご馳走になる
14:30 頃　　レンタカー②で水山養殖場発、折石海岸散策（労働ボランティアと同一行動）

17:30	からくわ荘到着後、荷物を各自まとめる
19:00～	夕食・ ミーティング
20:00～	入浴・打ち合わせ 等
20:30～	「反省会」と「お疲れ会」
24:00～	各自 就寝

21 日(木)　労働ボランティア・研究ボランティア　共通

6:00 ～7:00	朝食、宿泊部屋の片付、荷物を大型バスと中型バスに振分けて積込
7：30	からくわ荘 出発（中型バス（送りのみ）とレンタカー①②に分かれて乗車）
8：30	陸前高田市復興サポートステーション 着 、受付・説明など
9：30 頃～	ボランティア活動場所へ移動 ボランティア要請の農家の畑で復旧作業
12:00～13:00	昼休み（お弁当）昼食及び休憩のためマイクロバスを追加配車
14:30 頃～	作業終了、後片づけ（作業現場・レンタカー①②でサポートステーションへ繰返し往復送り）
15:00 過ぎ～	大型バス到着、同車で着替え、長靴・ビブス回収、サポートステーション、大型バスで出発（牛田課長補佐と境技術専門職員はレンタカー①②を返却のため別行動）
16:00 頃～16:30	お魚いちば に立ち寄る
17:00 頃～	復興商店街南町紫市場　到着・買い物など
17:30～	復興商店街南町紫市場 代表者の方のお話し・聞き取り
18:00～	夕食 ＠復興商店街南町紫市場
19:00 過ぎ～	入浴 ＠亀の湯
20:15 頃	気仙沼を出発
21:45 分頃	一ノ関駅（西口）、牛田課長補佐と境技術専門職員が乗車、途中下車組 3 名は解散

22 日（金）10:00 頃　京都大学到着・解散

６．参加学生による活動報告

第４回京都大学学生ボランティア報告書（参加学生版）

2013 年 4 月 26 日（金）

作成　第４回京大学生ボランティアメンバー

（１）はじめに

この度は、第４回京都大学東北復興支援学生ボランティア（以下、京大ボランティア）の実施にあたり、多大なご支援を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。京都帰還から日にちが経ってしまいましたが、第４回京大ボランティアメンバー間で反省会を複数回行い、良かった点・反省点をはじめ、次回以降に向けた課題・提案を複数挙げることができました。また、その点に関しまして、今後の京大ボランティアの運営・実施にあたり、（実施主体の議論を別にして、）フィールド研に協力を要請しなければならないことも記載しておきました。お手数おかけいたしますが一度お読みいただければと思います。最後になりましたが、今後の京大ボランティアの活動に対しても、ご支援・ご指導の程よろしくお願い申し上げます。

（２）各班からの報告（活動内容報告・よかった点・反省点など）

（２－１）教育支援班

(1) ポスター発表・座談会（13:30～17:00、大講義室）

延べ 30 人程度の生徒に対して、ボランティアメンバー各人が受験勉強、自分の得意なこと、興味のあることなどをポスター形式で発表した。また、座談会を開催し、生徒からの質問に答えるなどして交流をはかった。

・ポスター発表テーマ
受験対策について、留学経験談、研究者になるには、学部・学科紹介、ゴリラの生態・カンボジアのキリングフィールドについて　など全 29 点

〇良かった点：
・全員にポスター制作をお願いしたことで、多種多様な発表内容を提供できた。
・学校内に残っている生徒を探して、交流会場に来るように呼び込みを行った結果多くの生徒が集まった。
・雑談などを含めた会話によって、大学というものを身近に感じてもらえた。
・座談会では、お菓子・飲み物を用意したことで気軽に参加できたとおもう。

〇反省点・今後の課題：
・交流会場に来てくれる生徒の数が予想より少なかった。イベント告知の方法などを見直すべきかもしれない。
・ポスター発表に際して、配置図などを用意しておくべきだった。
・発表内容リストを事前に送付したが、興味を引くようなタイトルつけてもらえばもう少しアピールできたかもしれない。
・一部の元気な生徒達によって騒がしくなる場面があった。まじめに勉強の話をしたい生徒のことを考えると、教室を分けるなどの対策を検討するべきか。
・発表形式や当日のタイムスケジュールなど、教育支援班と他メンバーの意思疎通があまりでき

ていなかった。

(2) 気仙沼高校ボランティアクラブ（以下 VFC という。）・生徒会とのミーティング（15:30～16:30、教室）

ボランティアクラブ３名、生徒会９名に対して京大ボランティアメンバー７名でミーティングを行った。

議事：

・次回以降の学生ボランティア派遣時 VFC との共同ボランティア活動について

VFC からは海岸の清掃、植林などの案がでた。京大からは仮設住宅の訪問、牡蠣養殖の手伝いなどを提案した。『森は海の恋人』の考えに即して、次回ボランティア派遣時以降に、植林・海岸清掃・牡蠣養殖などを一体化した活動を行いたい。

・気仙沼高校文化祭(以下気高祭という。)、京都大学学園祭(以下 NF という。)におけるブース出店について

気高祭では、京大のブースが確保できれば京都の特産品などを販売する模擬店を出店したい。また、ブースが確保できなくても、気仙沼・被災地に対するメッセージを京大側が集めて展示してもらいたい。NF では、気仙沼をもっと PR したい。また、気仙沼高校紹介の VTR を現在作成中で、NF での上映も考えている。

・月刊のニュースレター製作などを通した継続的な支援・交流について

毎月掲示する、京大学生ボランティア発信のニュースレター創刊を目指す。高校生が受験や進路を考える上で参考になる内容を、京大生が自らの経験などを踏まえて書く。また、修学旅行で京都を訪れる気仙沼高校の生徒に向けて、京都のおすすめ観光地や食事処などの情報を提供する。

・被災地（特に気仙沼高校生）が京大ボランティアに求めること

物資はほとんど充足しているため、もの以外の支援が重要。市内に大学がない気仙沼では大学生の生の声を聞けるのがうれしい。勉強に関しても、先生とは異なる視点・立場からの勉強相談や講義などしてもらえるとうれしい。学習支援以外でも「何かしたい」という気持ちをもってきてくれることはうれしい。もっと多くの人に気仙沼・東北の良さを知ってもらって、観光などで足を運んでもらい、お金を使ってもらうことが一番被災地のためになる。

〇良かった点：

・実際に被災地の生徒が、『何を求めているか』を聞くことができた。
・自分たちだけでは思いつかなかった活動案を得ることができた。
・次回以降のボランティア派遣に活かせるような内容のある議論ができた。

〇反省点・今後の課題：

・前回参加者との連絡が不十分で、高校の先生方との意思疎通がうまくはかれていなかった。
・先生への連絡はできる限り頻繁に行うこと。また、メールよりも電話の方がよい。
・議題に対する事前準備が不十分だった。事前に班内で意見をまとめておくべきだった。
・継続的に交流していく必要性が高い教育支援班のメンバーの大半が３月に卒業する学年だった。
次回以降に引き継いでいくためにも、メンバーの年齢構成は重要。
・ボランティア派遣時以外の交流活動をどのように行っていくかが重要。

（２－２）新企画班
日時：2013 年 3 月 19 日（火）8:30～17:00
場所：気仙沼復興協会ならびに気仙沼市（周辺を含む）
内容：農地での瓦礫等の撤去作業・気仙沼市周辺の散策

今回、新企画班では活動日のうち１日を利用して、気仙沼復興協会（以下、KRA という。）を介して現段階で求められるボランティアニーズに応えることを企画しました。そして、結果的には、とある農地での瓦礫等の撤去作業に従事するということが実現しました。またボランティア作業後においては、KRA のスタッフのご厚意と計らいもあって、気仙沼市の周辺地域をご案内していただき、復興の現状を直接、自分たちの目で確かめ・聞き取ることが出来ました。このことに関連して、はじめに活動内容の詳細を紹介し、次に現地での活動に関する反省点を述べます。その上で、新企画班として今回の企画を立てた立案過程に言及しつつも、新たな企画立案をするであろう次回以降のメンバーに向けたアドバイスをさせていただきます。

今回の作業現場であった農地は、大きく４つほどの区画に分かれており、（事前にボランティアないし機械が入っていたためか、）その中にはきれいに整理された区画もありました。私たちは他のボランティア団体の方や個人の方と共同で、シャベルで少し掘るぐらいまでの深さにおける、石（小さなものも含む）や木片、ガラス、小物類といった生活の跡を想起させるものを種類別に集積し、除去する作業に終始取り組みました。その後の気仙沼市周辺地域を見回った際には、建物の土台を取り壊したり盛土をしている作業現場、震災の災禍を伝える慰霊碑や船舶、取り壊されることすら進んでいない「空白地帯」といった場所のみならず、復興のシンボルや気仙沼の観光スポットも紹介しながら、東北の現状に関するありのままのお話をして頂きました。

さて、現地での作業をするにあたっての反省点に移りたいと思います。今回の取り組みの壁になった一番の「問題」は、具体的な活動現場の所在地・活動内容が分からないまま京都を離れてしまうという「現実」ではないでしょうか。つまるところ、派遣１週間ほど前になって、とある農地での瓦礫等の撤去作業が当日のボランティア活動内容だと分かるとともに、KRA での当日受付時に、はじめて具体的な活動場所が分かるということです。そのため、現地に関する詳細な地図やカーナビゲーションシステムといったものに加え、利便性の高い複数の車両、現地の方の生きた情報が必要になることを切実に感じました。（今回は、当日送迎して下さった国民宿舎の方に助けられた側面が非常に大きかったです。本当にありがとうございました！）また、必要になる道具類も把握することが出来なかったため、防塵マスクやゴーグル、軍手といった KRA のホームページに掲載されている必要最小限の「必需品」のみフィールド研に用意していただく形となりました。（結果的には、KRA でシャベルやザルといった類をお借りすることができ作業に支障はありませんでしたが、万一の場合の際に現地で購入する等も想定しておいた方がよいでしょう。）その他にも、周辺地域でトイレをお借りする際のマナーなどにはくれぐれも注意してください。（自戒の意味も込めて）ボランティアは周囲の助けがあってはじめて成り立つものです。

このような現地での作業における課題を述べたところで、京都での企画段階についてお話しさせてもらいます。第４回京大ボランティアメンバーは３つの班のいずれかに配属されるということもあり、新企画班は７名でスタートしました。１回目のミーティングは全体ミーティングとも重複していたため、まずは自己紹介といったことや、およそ考えられるボランティアの新企画候補を複数挙げてみることからはじめました。具体的には、慶應義塾大学ボランティア南三陸プロジェクトとの合同企画といった具体的なものから、ボランティアセンターを介した作業といった抽象的なものまでと、幅の広いものを想定していたことになります。結局その段階では、次回ミーティングまでにそれぞれに関して詳細な情報を各自が入手してくることを課題にしてお開きにしました。その１週間後ぐらいに行われた２回目のミーティングの際には、気仙沼市においては気仙沼復興協会という団体が外部団体のボランティア受け入れをしているという情報をもとに、現地で求められる現在のボランティアニーズの種類や、実施可能性について実際に問い合わせま

した。(一方の慶應義塾大学とのコラボ企画は、企画の調整が困難であること、活動地域が異なること、お互いの企画がそれぞれたくさんあることなどからして困難であることが分かり、別の機会で交流することだけ確認することになりました。) この際、KRA との今後にわたる連絡担当者を決めたのですが、研究ボランティアメンバーに任せてしまったということもあって、後にズレが生じたともいえます。(こちらとしては、先遣隊派遣メンバーになる可能性が高いとの予測に基づいての判断だったのですが…。) また、新たに決まった連絡係も復興協会との調整は初めての経験だったので、色々と苦労することになりました。例えば、ボランティア名簿の提出が挙げられます。具体的には、提出期限がボランティア活動の 10 日前までという設定であることに加え、生年月日や現住所といった想定外の個人情報を連絡係が掌握しておく必要が生じたということです。この問題に対処するために、応募用紙に名前のフリガナ、生年月日、血液型、長靴の大きさといった、およそ必要になる情報をフィールド研が募集段階で一元的に収集・管理し、学生サイドが必要になった場合は、フィールド研の事務にその旨を伝え、情報の提供を必要限度内で受けるという仕組みをすでにフィールド研の方に提案しておきました。その他、KRA を介してお弁当を発注することなどに際しても、KRA と事前から連絡を密に取り合うことの必要性を感じました。私達は、被災地・被災者へ真摯に向き合う過程において、KRA ともしっかりと向き合う必要があったのです。

最後に、次回以降そもそも新企画班があるのかといった問題は別にして、2 点ほどアドバイスをさせてもらいます。

1 点目は、現地で求められるボランティアニーズが何を意味しているのかを考えてほしいということです。今回の新企画班メンバーはボランティアニーズ発掘に対する意欲が強く、KRA を介してのボランティア企画を初期の段階で立案しましたが、その後、ある種の「思考停止」を生じさせてしまったと私たちは総括しました。実際、KRA の HP/BLOG を定期的にチェックするだけでも、現地で求められるボランティアの種類が推移している様子・背景を考察できたと思います。そのことをまとめた事前勉強会をするなど、自分達らしい形でいいので、最後まで取り組む姿勢を維持してもらえれば、もっと良いボランティアと現地に対する深い理解が得られることでしょう。

2 点目としては、ボランティアを継続させる重要性についてです。今回作業をした現場ですら、今後も支援が必要な状態であることには依然として変わりありません。このことに加え、これまで最優先課題として扱われなかった農地再生等に関するボランティアニーズの高まりは今後も続くことでしょう。社会全体レベルの風化傾向に安易に流されることなく、現地で求められるボランティアニーズに少しでも貢献できるようなボランティアを継続してもらえれば嬉しい限りです。

（２－３）フィールドワーク班

日時：2013 年 3 月 18 日（月）8:30～9:50 ； 21 日（木）8:30～20:00
場所：気仙沼唐桑地区ならびに南町、陸前高田市
内容：唐桑ビジターセンター・津波体験館、農地での瓦礫撤去作業、復興商店街南町紫市場 訪問・聞き取り、亀の湯での入浴　など
事前の活動：懇親会、「事前勉強会」、「旅のしおり」作成
その他の活動：バスレク

〇良かった点
・バスレクが一時なくなりそうだったが、実施することになってよかった。
・バスレク楽しかったです。担当の方ありがとうございました。
・南町紫市場に担当者がお土産を用意してくれていたこと。ありがとうございました。

・単純にミーティングがあって、ご飯に行くとかが楽しかった。
・最初のフィールドワーク案を出しあうところが一番自分の中で、自分の関心は何なのか、何を知りたいのか、何を見にいきたいのかとか勉強会以上に勉強になっていたかもしれません。
・陸前高田市復興サポートステーション（以下 P@CT という。）が晴れててよかった。
・ビジターセンターの津波発生模型のキーッときしんだ音の後に、波紋が広がってチャプチャプと音を立てたのが津波体験以上に心に残った。
・自分が人の写真撮るの苦手で遠景 10 枚とかしかなかったんですが、skydrive に大量にあげてもらえててよかったです。
・他団体・個人の方と一緒に活動できたこと。KRA と P@CT の両方で活動できたことで、両地域が抱えている問題と特有の問題について考察することができた。
・屋外ボランティアをするときは、雨風・寒さをしのげる場所を確保しておくと良い。昼休みなどご飯を食べるときに萎えます。。
・銭湯に行ったのがとても良かった。

〇良くなかった点・改善しうる点
・メーリングリスト、ラインの登録でゴタゴタしてしまった。最初の 2 週間くらい誰が班員かわかっていなかった。名簿を早くフィールド研にもらいにいっていれば改善できた。
⇒フィールド研は班が分かれていること自体を把握していなかったと思う。また、連絡手段の一番の問題点は、全員が一斉に連絡を取れるツールがなかった。ラインにもメーリングリストにも班員全員は入っていなかった。
・最終日は京都まで夜間移動する都合上バスの拘束時間を気にしなければならず、予定が厳しくなった。フィールドワークのようなバス移動が多くなる企画の日には、バスを長時間拘束できる日をあてがった方が良い。
・個人の仕事量の差。仕事を上手く振り分けられなかった。訪問先につき 1 人連絡担当者がいればよかったため（それ以上いると訪問先もやりづらいかなと）、訪問先以外の人はあまりやることがなかった？復興商店街と亀の湯、事後報告会の担当者が重複してしまった。p@ct としおり係も重複。２人ともありがとうございました。
・人数が多く、また忙しい人が多かったため、まとめるのは厳しかった。多分全員がミーティングに参加したとしても生産的でない。
・ミーティングに参加しないのはいいとして、2 分ぐらいあればできるアンケートの回答率すら悪かった。
・引き受けた役割に関するメールは無視しないこと。できないなら早めに言うこと。全体に迷惑がかかります。
・フィールドワーク班は楽めな班ということで集められたが、実際仕事は比較的多かったと思う。アポ先が多く、時間調整など必要だったので…。新企画班の手が空いていたのなら、しおりやら勉強会やらを任せても良かったと思う。
・勉強会の準備はもっと早くできたのでは。
・雨の日だった場合の予定を決めるのが難しかった。
・良くないことというわけではないが、森里海連環学やフィールド研が関係していることも考えると沿岸部の激甚被災地のみならず山間部の集落等の話を聞けるとまた違った被災地像が見えたかもしれない。
・ボランティアセンター等で作業するのに、ここ最近行われたボランティア・ボランティアセンター等の情報について知らないのはどうかと思う。用意できる（はずの）ものまで現地にすべて頼むといった姿勢はよろしくないのでは。
・ボランティア終了後の着替えの場所に関して、思っている以上に適所がない。

（２－４）研究班
研究ボランティア　藤馬、岡崎、内海

●活動内容
3 月 18 日　午前　舞根湾で船に乗り魚類採集
（調査の目的）大規模津波後の水質や、底生魚類相の種や個体数の変化を観察すること。環境が大規模にかく乱されると、ある年にはある種が増殖し、次の年にはまた違う種が増殖する、など、普段見られない変化が起こり、環境が回復していくにつれ、生物相も徐々に安定していく。どのように安定していくか、を記録として残すことが重要。
（調査方法）①幅１ｍの桁網を海の底にあて、船を進ませて、海底上の生物（海藻・ホヤ含む）、岩などをすくった。②船上で、網の中のものをバットに入れ、魚類・甲殻類と海藻・ホヤ・岩などに分け、前者はパックに入れ冷凍させサンプルとして持ち帰り、後者は海に捨てた。ハゼ類、マコガレイ、ギンポ、アナハゼ（カジ類）などが採取できた。

午後　気仙沼舞根湾調査グループ第 4 回全体会議に出席
（気仙沼舞根湾調査グループについて）京大フィールド研初代センター長の田中克先生を中心とした大学教員、学生の研究グループ。2011 年 5 月から隔月で舞根湾の生物・環境などの総合調査を行う。
（会議の流れ）
研究で新しくわかったことを各自発表、ディスカッション。
２、森里海研究所建設（新しく建てる研究施設、今はプレハブで対応。）について。
３、資金繰りについて。
４、自然観光による気仙沼の活性化。
全体を通して、防潮堤問題の話がよく出ていた。

3 月 19 日　津波により発生した塩性湿地の底泥を採取
＊午前 1 名が他研究者の補助。午後 1 名が卒論生のサンプル採取補助。
（調査の目的）津波により発生した湿地（A湿地と呼ばれる）の底生生物、塩分等の変化を継続的に調査しており、今回もそのうちのひとつ。今後も継続的に変化を観察していく。（京大院生熊谷さんの修士論文の調査）
（調査方法）
＊底生生物採取、堆積物採取、塩分等測定は定点 34 地点で行った。
【底生生物採取】①エクマンバージ型採泥器で堆積物を採取し、1 ㎜目の篩に入れ、それを湿地の水の中でふるい、余分な泥を除いた。②篩の中から、岩など明らかにサンプル瓶に入らないものを取り除いた。③サンプル瓶に篩上の残存物を入れて、１０％中性ホルマリンで固定した。
＊サンプル瓶は実験室に持ち帰り、底生生物を個体別に同定、計数、計量する予定。（熊谷さん）
【堆積物採取】①湿地の堆積物を径 4.3 ㎝のコアで採取した。②化学分析用の試料として、堆積物の表面から 1 ㎝層と 3 ㎝から 4 ㎝層の堆積物をビニル袋に入れた。③クロロフィル分析用の試料として、堆積物の表面から 1 ㎝層と 3 ㎝から 4 ㎝層の堆積物をビニル袋に入れた。
＊　袋は実験室に持ち帰り、分析する予定。（熊谷さん）

【塩分・水温・水深・溶存酸素調査】満潮の時、干潮の時に塩分、水温、水深、溶存酸素を各地点で計測した。

3 月 20 日　午前　前日の続き。

●良かった点

・生の研究の現場に触れられたこと。自然相手の地道なサンプル採取を、海・湿地で行うことは、ほとんどのメンバーにとって初めての体験であり、新鮮だった。特に文系のメンバーにとっては、普段味わえない経験となった。

・震災に伴う地盤沈下（75 cm）により、湿地が生まれ、そして生物相や環境の変化が起こっていく、という滅多に見ることができない過程を研究する現場に立てたことは貴重な経験であった。

・海の生物や調査方法などの知識を得られた。

・調査、会議を通じて、最前線で研究されている学外の先生方のお話が聞けたこと。また、研究グループに関わっている学外の学生と交流でき、自分の大学での学習意欲が上昇したこと。

●反省点、今後の課題

・研究ボランティアの活動に関して、何も予習せずに行ったこと。研究内容や調査内容を事前にチェックし、自分たちで下調べをしておくべきだったのでは。

・今回は研究補助のお話を早めにいただいていたため、他の研究者・学生の研究補助にあたった。しかし、今までの研究ボランティアのように、「自分たちで何かテーマを持って研究する！」というくらいのモチベーションがあった方が良かったのかもしれない。

●感想

・一番印象に残っているのは、同世代の活躍、モチベーションの高さ。他大学の同世代の人たちはとても意欲的に研究活動をしていた。今年卒論を書く予定だが、自分も負けじと頑張ろう！というモチベーションのアップにつながった。もちろん、素晴らしい先生方のお話を聞けたこと、珍しい環境で調査できたことも非常に嬉しく、光栄に思う。（内海）

・印象に残った点として、全体会議の話し合いであった。震災での理系研究者と防波堤のかかわりについて、各々の研究者の意見を聞けたのは、文系の私にとって新鮮なものであった。日常のニュースなどでは知ることができない今回ならではの体験でした。また研究調査の大変さを認識することができ、私自身にとって大きな糧になりました。（岡崎）

・私は、就職前最後の春に、震災後の東北の現状をこの目で見たいと思い、この調査に参加した。就職後は、環境保全や都市計画、地域活性化を対象とした分野で活躍したいと考えており、実際に現場を見ておくことが重要と考えたためである。そして、今回のボランティアで、その目標を達成することができた。特に、調査において、復興と自然再生との拮抗という問題点を学んだことが印象的であった。フィールドワークだけでなく、気仙沼市復興商店街の方から聴いたお話も心に残った。2 年経過後の被災地で現地の方からお話を聴いたこと、環境保全に関する調査を行ったことは私にとって大きな学びであったし、今後仕事をしていく上でも活かしていきたい。（藤馬）

（3）次回以降に向けたその他の課題・提案

各班からの報告によって主要な論点は洗い出されましたが、まだ触れられていない論点に関しまして箇条書きの形で紹介した上で、私たちなりの改善案を示します。

＜運営面＞

・ 次回以降そもそも「班分け」をするのかという問題がある。

・班によっては前回以前からのメンバーが主導になってしまった面があるので、第 4 回から参加するメンバーにもっと主導権を与えても良かった。

対策：初参加メンバーしかいないと班の運営が大変になるので、ある程度は前回メンバーがサポートしていく方が良い。ちなみに、第 4 回京大ボランティアでは、「フィールド研+谷崎、小貝、内海」というメンバー構成で MTG を行っていたが、MTG 参加者自身が企画全体を把握しているわけでは無く、また、今後もおよそ難しいと思われる。せめて「フィールド研+各班代表」くらいで MTG を定期的に開くことが必要になる。

・メンバーを選抜する制度を導入したが、応募者の関心度合いに差が見受けられなく、判断できかねると思う。

・途中で辞退者が出るのは基本的に望ましくない。

・メンバーの人数が多すぎはしないか。できる活動は増えるが、集団としてのまとまりが維持できるのか疑問である。

対策：東北に赴き、知ってもらうことは一つの大事な目的なので、できれば応募者全員に東北へ行ってもらいたいし、そのような規模を維持したい。モチベーション維持は運営方法と事前・事後活動で改善されるはずです。

・個々人の仕事量の差が大きすぎる。

前提条件：関われる時間が個人間異なるのは不可避である。ただ、効率よく運営をすることで各自の仕事量そのものを減らすことは出来る。

かつての見解：第 3 回京大ボランティア終了後の反省の場にて、運営に関わるメンバーと当日中心のメンバーの募集を分ければいいのでは、という意見があったが、人数調整の問題と手間の問題があり、断念した経緯がある。

考えられる対策： 募集は 1 回のままにして、例えば「希望するボランティアの種類（ex.運営、研究、労働）にチェックを入れてください」、もしくは「ボランティア企画の運営に関わりたいですか？ はい、いいえ、どちらでもよい」に回答してもらう、志望動機欄に企画・運営にどこまで関わりたいのかを書いてもらう、等の措置を設ける。その上で、班の中で誰を中心に回して行くのかを明確にすればよいと考える。 なお、当日のみメンバーも含め、応募者全員には、第 4 回京大ボランティア募集時と同じように志望動機を書いてもらう。

生じうる問題：運営メンバーと当日のみメンバーの間に溝ができる？

対策：当日のみメンバーもどこかの班には所属させるとともに、議論にも参加できるときに来てもらえるようにする。また、事前の親睦会や全体ミーティングなどで交流を図っていけば良い。

その他の問題：NF に関する言及についてはどうするのか？

対策:事後報告会をNFで行う旨は伝えておくべき。詳細は活動終了後に議論することになる。(ex.第4回メンバーにも協力要請をする)

＜事前活動＞
・「先遣隊」時において完成版の企画書に近いものが出来上がっていなければならなかった。
・「先遣隊」に関して派遣されるメンバーは教育支援班との綿密な事前協議が必要であった。

対策:「先遣隊」派遣を遅くするのも、フィードバックの観点からして限界があるので、もっと「先遣隊」までに企画案全体を練っておくべきである。また、練った企画については、「先遣隊」で行くメンバーと企画を練ったメンバーで話し合いする機会を設ける。

・前回メンバーからのカンパはありがたいが、使うのがためらわれる。個人特定からのカンパはなおさらである。それぐらいなら、参加メンバー1人当たり〇〇円の方が気楽。

対策：前回メンバー複数人からのカンパは受け取るなどとすればよいのでは。ちなみにではあるが、第3回・第4回京大ボランティアでは会計係を設け、学生間での必要経費に関して処理を行っている。

(その他)
・出来るだけ京都で企画の準備をして行って欲しいですが、少々企画に問題があることが分かっても、現地で解決策を考え抜くこと、ならびにその姿勢が大切。
・テレビの震災特集や、ウェブ上の震災特集関連をまとめて「事前勉強会」をすると、現地に対する理解度が大いに変わってくる。

＜交通手段＞
・バスでの諸注意をするときはマイクを使うこと。後部座席の人には聞こえないので。
・出発時の点呼は毎回ちゃんとする。
対策：置き去り者が発生しないように、次回以降対策を講じる必要がある。方法としては、諸注意はマイクで行う、毎回必ず点呼を行う、バスから降りる際には携帯を持って行ってもらう、などを組み合わせることが考えられる。また、対策マニュアルを作成し、学生・教員とも各々1部持っておくと安心である。

(その他)
・バスレクが良かったです。自己紹介は長めにすると早くみんなを覚えられます。
・荷物を事前に積みこむと、大幅に時間短縮になる。
・バスの中は乾燥するので、各自対策を考えましょう。(マスク着用など)
・帰りのバスが夜行であるならば、安眠グッズなどがあると良いです。

＜現地＞
・訪問先の情報（営業時間、駐車・待機スペース）が分かっていないのはどうかと思う。
・現地での買い出しを誰が担当するのかを事前に確認しておくべきだった。
・ボランティア終了後の着替え場所に関して、思っている程に適所がない。
・屋外ボランティアをする時は、雨風・寒さをしのげる場所を確保することを忘れないように。昼休みなどごはんを食べる時に寒いと体調に影響が出るので。(マイクロバスに待機していただくなど。)
・基本的な社会的マナー。公共施設にトイレを借りるときにお礼を言うことや、訪問所から帰る

ときにはゴミや荷物をきれいにすること、公の場所や宿舎の食堂で大声を上げたり、ふざけすぎたりしないこと。
・水山養殖場で、内輪で盛り上がりすぎてた人たちがいたこと。個人差もあると思うが、質問したりして、もっとおばちゃんやおじさんたちと話してもよかったんじゃなかろうか。

対策：被災地に赴くとはどういうことなのか、考えさせられる出来事でもあった。次回以降、気を付けていただきたいと思う。なお、調べた担当者はその資料をスキャンして、そのままskydriveにアップしてもよかったかもしれない。決められることはできるだけ決めていく、このことは鉄則である。

・バスの拘束時間の問題。他の運転手に運転を代行してもらうのか、他の移動手段を使うのか判断しておこう。
・国民宿舎の社長さんが判断されたことだが、道路の混雑状況・工事車両の存在について考慮しておくべきだった。googleマップ上での議論なんて机上の空論だと感じた。

対策：前者に関しては、学生間だけでは解決できない問題なので、フィールド研とも再確認・認識共有しておきたい。なお、現地で利用できる代替手段は思っている以上に限られている。後者に関して、朝方夕方ごろの通勤ラッシュは言うまでもなく、陸前高田は未だ工事車両の行き来が多いこともあり、どの時間帯においても予定時刻までに移動が完了しないことは覚悟しておいた方が良い。また、今回の様子・感覚を報告書だけで引き継ぐのは難しいので、学生・教員とも、前回参加された方の何人かが再び参加するという仕組みが可能なのであれば、少しは解消されると思う。

・労働ボランティアと研究ボランティアとの処遇の違い（ex. 弁当格差の是正）
・研究ボランティアはその研究結果を現地に報告・還元できないか、現状では現地でデータを頂くだけになってはいないか…と、ある人に指摘されました。

対策：前者に関して、団体で動くので弁当屋さんに頼める労働ボランティアと違い、数人で活動する研究ボランティアの食事がどこかで購入する形になるのは仕方ない。なお、たとえ１日でも労働ボランティアと共同作業が出来たことは高く評価している。後者に関しては、作業内容としては、大学間の共同調査ということで活動内容が充実していることに加え、現地の人に負担をかけるようなものではなかった。また、サンプル採集の結果は現地で活かされている。

（その他）
・簡単な振り返りの場を毎晩設けてみたらどうか。
・日ごとに日誌をつけておくと、後日報告書を書くときに楽です！
・研究ボランティア用に借りていたのかもしれないが、小回りの利くレンタカーが数台あることは利便性があった。トイレが比較的近場に存在することが分かってよかった。
・マイクロバス・大型・中型バスなどを使い分けたこと。費用の許す限り継続したい。
・お魚いちばでの食事は１１時からです。
・銭湯に行ったのがとても良かった。
・怪我人が発生しなかったこと。

＜からくわ荘＞

・荷物の積み込みを翌日に控えているという状況の割には部屋が散乱していたので、「部屋の片づけタイム」⇒「反省会」⇒「お疲れ会」にすれば良かった。
・途中日での「反省会」が良かった。現時点での反省は、残りの日の活動で活かしてほしいと思います。
・国民宿舎での食事代は部屋で回収したこと。食堂では周りの人に迷惑になるので。
・旅館のカラオケを使う時は許可を取らなければならない。
・飲み過ぎには注意。
・コンセントが少ないので、タコ足コンセントは必須です。ドライヤーも見当たりませんでした。

＜フィールド研関係＞
・ フィールド研は最初のころにミーティングを開催し、ボランティア保険の加入手続き、RI に関する情報提供、応募志願書などに関すること（フリガナ、生年月日、血液型、長靴の大きさ、現地集合・解散についての是非）など、事務的なことを片付けられないのだろうか？
・フィールド研との最終確認は特定の代表・責任者だけと執り行うのではなく、学生側の各班代表者など、もう少し対象を広げるべきだった。日程に関しても、もう少し早い段階で具体的な議論をできるようにしたいです。複数回話し合いを行ってもよかったかもしれません。（お忙しいでしょうが…。）
・ 先生方の交代が多すぎるために、先生間で情報の引継ぎは十分行われていたのだろうか？
・フィールド研の募集案内ページの持ち物欄が 2 年前の当初のままになっている。過去の経験を踏まえて更新した方が良いです。
・写真データの提供ありがとうございます。
・フィールド研がボランティアに必要な装備品を丁寧なまでに取り揃えて下さったこと。経費節約のためにも、ある程度は学生に買わせても大丈夫です。（回収には今後も協力していきますが・・・。）

＜事後活動＞
・ 聞き取り（内容）に関しても、きちんとした報告をまとめるべき。担当者を設ける。
・ 聞き取りなどを行ったが、いかに語り継ぐのかという議論が欠如していたと思う。他大学なら自身の HP/BLOG での活動報告が公開されているが、自分たちは京都大学の公式 HP など強大な発信力を有していながらも十分な発信を行っていないと考える。
・観光や散策が多すぎるのではないかという意見が考えられるが、それよりも、魅力を感じたうえで情報発信するなり、再訪問するなりして初めてボランティアに位置づけられる（完結する）ものだと思う。

対策：聞き取りに関しては、今回は一部抜粋という形でこの報告書に記載いたします。次回以降は日誌の担当者を設けることで改善を図りたいと思います。また、学内に対しては「報告」という形で伝えられないかと考えています。ただし、単に自主的に作成し掲示したところで、他のサークルの掲示物に埋もれることが考えられますので、例えばですが、 第 5 回の募集ビラに添付して（フィールド研公認物として）教務掲示板・生協などに貼ってもらう（自分たちで貼る）ことを提案いたします。また、将来的には対外広報として、独自の Web サイトを運営するなども検討いたします。そして、5 月の「事後報告会」以外にも、NF の場にて、第 4 回・第 5 回京大ボランティア合同の報告会を開催する案もございます。

・第 4 回メンバー主体で気高へのフリーペーパーなるものを作成することになりました。現地での交流だけでなく、関西からでもできることを実践するためです。現在テーマ選定中であり、決まり次第メンバーに執筆依頼をしてまわります。5 月中には第 1 号を完成させたいと思っていま

す。

・この団体は新たなメンバーをどんどん巻き込んで発展してきました。その一方、過去に参加された方へのフォローが十分でなかったようにも思えます。ですので、これからはメーリングリストやFacebookなどで他のボランティア団体も含めたボランティア情報や現地の様子を共有できればと思います。（各回のメンバーに呼びかけて歴代参加者の交流会をしてもいいかもしれません。）

＜第5回京大ボランティアへの提案、申し送り事項＞
・同じことを繰り返していればよいサークルではない以上、「魚」を与えるのではなく、「魚の釣り方」を教える（学べる）団体にしてほしい。
・気高祭（2013/8/31）への参加の判断について
⇒「気高祭への出店は、２～3人ほどが（先遣隊を兼ねてでも）参加したらどうか？」という意見も考えられる。確かに20人強のメンバーが押し掛けるほどのことなのかという疑問が生じることに異議はない。（人数的にも先遣隊でも何とかなる。）ただ、気高祭に合わせて派遣するとしても、全員が気高祭に参加する必要はなく、2班に分かれて活動するなどしても良いはずなので、柔軟に考えてもらいたい。
・「福島県歴史資料館」http://www.history-archives.fks.ed.jp/ でのボランティア活動。
・「いわてGINGA-NET」http://www.iwateginga.net/ の夏銀河2013(?)との連携。
・「京都大学サマーデザインスクール2012」
http://www.dl.kuis.kyoto-u.ac.jp/summer_design2012/-/ja のような課題解決型ワークショップ。現地の方と語り合いながら地域が抱える問題の解決を目指す。
・女川にある高校生主体のラジオ局との交流・共同企画、ＮＦの会場で流す。
・2013年8月23日に震災復興の取り組みに関するシンポジウムが京大であります。
・防潮堤問題をフォローし続けてください。
・2013年度分の予算案は6月下旬に発表されるのですが、仮に削減された場合は、自己負担率を高めてでも、ある程度同じ規模を保つように心がけてほしいです。（神戸大学は一人あたりの事実上の負担金を20000円に設定しています。）
・活動日に関して、長期休暇において1週間ほど予定をあけてもらうことが求められるため、出来るだけ早めに派遣日程を確定させてください。

（4）まとめ

ボランティアから日にちが経過してしまうとともに、長文になってしまいましたが、今回も無事、第4回京大ボランティアの報告を取りまとめることが出来ました。今改めて思うのですが、前回のメンバーがボランティア終了後も次回のボランティアへの引き継ぎ・企画立案に対してのフォローを行う体制が「自主的に」作られ、継続していることが、この団体の一番の魅力です。なぜこの体制が維持されるのかに関しては、単に「組織化」を指向していることだけでは説明できず、むしろ6日間という短い期間ではありますが、実際に東北の地で学んだこと・肌で感じたことを伝えたい、そして、他の人にも体験してほしいという思いが強いからではないかと考えております。また、現地の復興に貢献するにあたっては、学年や学部を超えた多様な経験を持つ京大生（大学生）によるボランティアという形態こそが重要であり、このことをご理解くださっている京都大学ならびに、自主的な試みを最大限尊重して下さるフィールド研が私達の大きな支えになっております。この場を借りて御礼申し上げます。今後も現地のニーズを踏まえたうえで、現地や関西のボランティア団体と時として協力し合いながらも、自分たちらしいボランティアを継続していけるように頑張りますので、何卒よろしくお願いいたします。

７．今後のボランティア活動に関する課題、留意点（フィールド研）

（１）学生によるボランティア活動の検討について

本学学生による気仙沼高校と気仙沼・陸前高田ボランティア団体との事前の打ち合わせと周到な準備により今回のボランティア活動はスムースに進行した。学習支援活動は学生の自己表現の訓練ともなり、有意義であったと思われる。庄子校長からは「大学生と触れ合う機会が少ない生徒にとり、京大ボランティアとの交流は実地の大学生活を知るよい機会となっており、継続的な訪問は大変ありがたい」との謝意が伝えられた。今回は学期末であったこともあり、教室での授業方式の学習支援はできなかったが、ポスター発表や座談会を通して多くの生徒と交流することができた。これらの交流を基に、今後、両校における学園祭での交流、ボランティア学生によるニュースレターの発行など、新しい試みの案が出されており、継続的な交流に発展しつつある。

他方、気仙沼および陸前高田のボランティア団体がコーディネートするボランティアに申込んで、その団体の活動に参加する形での労働ボランティアは今回が始めてであった。津波時に田畑に運ばれた礫を取り除く作業であったが、学生は黙々と取り組んだ。気仙沼市と陸前高田市においてそれぞれ１日の作業ではあったが、学生にとり、地元ボランティア団体との交流ができた点、津波という自然災害のすさまじさを体験できた点で大変有意義であった。

これらの学習支援および労働ボランティアはすべて学生自身による自主的な計画案を基に教職員が示唆を加えて計画を決定、実行したのであり、立案、外部との交渉、実施などボランティアを実現させる過程での様々な経験を通して、学生は大いに成長したと確信できる。本学のボランティア活動については教職員がメニューを用意すべきとの意見はあるが、学生の自主性を尊重したこれまでの方針は継続すべきと考える。

今回の新企画である現地ボランティア団体の活動参加は、当日に受付場所まで行かないと詳細な内容が分からず、引率の事務・技術職員の関与度合いが難しかった。この企画の屋外活動については、スケジュール、道具類、雨天時の対応などついて、ボランティア学生・現地担当者・引率教職員とのより綿密な事前協議が必要である。

また、3 月下旬の春の暖かい日が続く京都を出発したためか、軽装の参加者が多かったように思われる。気仙沼でも初日雨天ではあったものの比較的暖かかったが、最終日の陸前高田では雪交じり風が吹き続ける厳しい寒さの中での作業となった。ボランティア団体から使い捨てカイロを頂き、ボランティア受入農家のご主人に焚火を用意してもらい、風よけのバスを急きょ手配するなどしてなんとかボランティア活動を終えることができた。こうした天候の変化も十分に予想して各参加者は準備するとともに、運営側も情報提供や実施にあたらなければならない。

（２）養殖場での活動について

本学社会連携教授の畠山重篤氏が水山養殖場のオーナーであることから、同養殖場には第１回ボランティアよりお世話になっている。今回も、重篤氏はじめ養殖場の方々に丁寧に対応していただいた。一方、水山養殖場は順調に復興しており、学生がボランティアとして養殖の補助作業に従事する意義が失われつつある。今後は、養殖場周辺の震災時に生じた湿地の環境改善にかかわる作業など、ボランティアの内容を再検討する必要があると考えられる。

（３）研究ボランティアについて

第 3 回ボランティアでは学生の研究ボランティアへの希望はなかったが、今回は 4 名の学生が研究ボランティアを希望し、3 名が実地に研究ボランティアに参加した（1 名は怪我により辞退）。京都大学は首都大学東京などが実施している舞根湾総合調査に参加しており、今回のボランティアと日程が合致したので、ボランティア学生がこれらの調査の補助に加わることが可能となった。ボランティア学生が自ら東北の震災にかかわる調査を限られた時間、経費により計画･実施することは困難であるので、今後も研究ボランティアを継続するならばその方法を検討するべきである。

（4）引率教職員の確保について

ボランティア事業に関与する教職員はボランティア活動の計画から実行、その後の報告に至るまで多くの時間を割かれる。本ボランティア事業を長期にわたって継続するには、特定の個人に負担が集中しないように、組織内での話し合いにより多くの教職員による分担と交代が必要である。今回のボランティア派遣は 3 月 17 日から 22 日までの 6 日間、現地での活動期間は 4 日間に及んだ。年度末の事務処理、学会や海外出張が重なり、6 日間を通して引率に当たったのは境技術専門職員のみで、他の 4 名の職員は途中での交替を余儀なくされた。引率を無理なく行うには常時 4 名の教職員が付き添う体制（1 回のボランティア活動に述べ 8 名の引率者）が必要である。フィールド科学教育研究センターおよび学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニットのみで本事業を継続するのは困難であり、全学的組織的対応が必要である。

（文責、横山）

８．記録

（１）記録写真・聞き取り内容・参加学生の声

（１－１）記録写真

3 月 17 日 7：00 頃　京都大学出発

17 日 8：00 頃　行きのバスの車内

国民宿舎エントランス付近

3 月 18 日　8：50　唐桑ビジターセンター館長のお話（防災・風化防止について）

18 日　同センター内の津波体験館

18 日　同センターの展示物見学

18 日 13：00 頃
教育支援　ポスター設営・準備

18 日　教育支援　ポスター紹介

18 日 14：00　教育支援　ポスター発表

18 日 15：00　教育支援 座談会の様子①

18 日　教育支援 座談会の様子②

18 日　教育支援 座談会の様子③

3 月 19 日 8:30　気仙沼復興協会での説明

19 日 10：00 農地での瓦礫撤去作業の様子①

19 日　農地での瓦礫撤去作業の様子②

19 日 14：30　農地での作業終了後の報告

19 日　農地での作業終了後の記念撮影

3 月 20 日 10：00
水山養殖業での牡蠣養殖補助

3 月 20 日 11：00
牡蠣を挟んだロープを筏につるす

20 日 11：50 水山養殖業の方と記念撮影

20 日 13：00 畠山重篤 氏による講演

20 日 14：30　ホタテをごちそうになる

「打ち上げられた大型漁船」と気仙沼の風景

折石海岸での集合写真

3 月 20 日 20：00 「反省会」の様子

3 月 21 日 8：30
陸前高田サポステでの受付・説明

農地での瓦礫等撤去作業の様子②

作業終了後の記念撮影

20 日 「反省会」の様子

21 日 農地での瓦礫等撤去作業の様子①

21 日 15：40
陸前高田サポステ代表のお話し

奇跡の一本松と陸前高田の風景

（研究ボランティア記録）

コアサンプル採取の様子

コアサンプル採取の様子

民宿「船渡」での調査検討会

湿地での底生動物の採集

舞根湾底泥の処理

舞根湾調査へ出発

調査合間の昼食

3 月 22 日 10:00　京都大学到着

（１－２）聞き取り内容（抜粋）

KRA ボランティア受入部の方より

・今まで気仙沼には 6 万人以上の方がボランティアに来て下さった。仮に 1 人が 1 つの石を動かせば、6 万個の石が移動したことになる。
・ボランティアで来た人の中には、なぜ被災地の様子をこれまで知らなかったのか、どれだけ貢献できたのだろうか、などと自分を責める人がいますが、そう思う必要はないです。私たちはそのような人との出会いから、日々元気をもらっています。
・地元に戻ったら、休んだ後に周りの人にもこのことを少しでもいいので話してみてください。（自分がどのような場所に来ていて、何をしたのかを自覚する（再確認する）プロセスを経ることは、）震災ストレスの解消のためにも大切なことなのです。
・観光でもいいから、また東北に来てほしい。
・まだまだ、石がたくさんあります。ご協力お願いします。

（KRA ボラ部デイリー報告 2013/3/19 より）

P@CT 代表の方より

・この復興サポートステーションの活動拠点を作るのに費用は掛からなかった。全て、これまでの人とのつながりで成し遂げたものです。
・陸前高田では見ての通り、多くの家屋・人名が失われました。その一方で、地域のつながりによって人命が救われたケースが多くあるのもこの地の特徴なのです。
・皆さんのようなボランティアが今後も来て下さることによって、復興を歩む私達に対して、これからも勇気や希望を与え続けてくれたらと思います。
・本日、陸前高田市復興サポートステーションでは、京都大学の学生の方々が活動して下さいました！寒い中での活動ご苦労様です。ありがとうございました！（Facebook 2013/3/21 日 より）

復興商店街南町紫市場代表の方より

震災後の当初は 2 店舗による青空市場からスタートしたのであるが、20 店舗が出店するまでに拡大した。その後、地方銀行との間で土地しか借り受けできなかったり、行政が瓦礫撤去しか行わなかったり、ある時は、衛生管理に関する行政法上のトラブルに見舞われたりもした。それでも、青年会や外部からのボランティアの継続的な支援にも助けられて、今の復興商店街の原型が出来た。とはいえ、「仮設」商店街であることも事実である。（かつてのシャッター商店街の時代を回顧しながら、）バスがそもそも来てくれるのか、冬に観光客は訪れてくれるのかといった心配が尽きることはなかった。また、現在はまだメディア等で取り上げられることがあるものの、今後風化してしまわないか、災害行政住宅の促進が図られるのか、といった問題点が多いことは、震災から 2 年が経った今になっても変わらない。この商店街がいつかは「壊される」建物である以上、今はまだ復旧の始まりにすぎず、将来的には店を reopen させることを模索している。街づくりにも係わることであるが、「今となってもいいから」若者にはぜひとも来てもらい、このことを持ち帰って発信してほしい。

（１－３）参加学生の声 より（抜粋）

22 日にボランティアから帰ってきました。
とにかく印象に残っているのは商店街で話をして下さった方の「今はやっと復旧が始まっ

たというところで、復興したなんてそら恐ろしくてとても口にできない」という言葉です。初めて訪れる被災地で様々な体験をさせて頂き、沢山のものを目にしましたが、本当にその言葉に集約されていると感じました。そしてよく耳にする言葉ですが、被災地の方々から沢山元気を頂きました。おにぎりや缶コーヒーを差し入れて下さった被災者の依頼主の方々、気仙沼の高校生達、挙げればきりがないですね。単純に、また行って微力でもこの人たちの力になることができればなあ、と思わせてくれる方々ばかりでした。また来春あたり行きます。最後に、お世話になった皆様ありがとうございました。学生ボランティアの皆様、またお会いできるのを楽しみにしています。

１７日から２２日まで気仙沼へボランティアに行ってきました！一回生のときに吉野作造記念館のシンポジウムでバスのなかから女川を視察しましたが、今回のボランティアでは、実際に現地に降り立ち被災地の方々と直に接することができました。被災地の方々と話していくうちに「防災教育施設」「防災庁」創設の必要性を感じたり、被災から２年が経ちどのような身の回りの変化が生じているのかなどさまざまなお話を伺いました。いつもの生活に比べてつらい環境でしたが、その分内容の詰まった濃厚な日々を過ごした気がします。お世話になったみなさま、ありがとうございました！今日（というか、昨日といった方がよいのか・・・？）まで気仙沼と陸前高田で大学を通じてボランティアをしていました。東北の津波の被害は一度目にしたことがありますが、そのときは何もせず見るだけに終わってしまったことが悔いとして自分の中に残っていました。今回は、少ない日数でしたが、少しくらいは東北の人のためになれたのかな・・・？印象に残っていたのは、家族や親戚や友人、近所の人が亡くなっていて、家も失い、多くの物を失っていたにもかかわらず、自分を含めたボランティアのメンバーに優しく接してくれていたこと。自分に余裕がないときに、他人に優しくできるのはすごい・・・・。ボランティアさせてもらったある農家さんが「まあ自然には勝てねえわ」と津波の被害を笑い飛ばしていたことも記憶にあります。自分が見てきたことが震災や被災者の方々のそれに対する態度のすべてだとは、夢にも思わないですが、自分が見た東北は思っていたよりもたくましく感じました。復興といえる復興がまだまだまだまだまだまだ先だとは思いますが、どうかその力強い歩みを止めないでいてほしいと思う。

（２）第四回学生ボランティア派遣の応募チラシ

森里海連環学で東北復興を！

第4回京都大学学生ボランティア募集

京都大学では，春休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする第４回学生ボランティアを派遣します。以下の要領でボランティアを募集します。誘い合って東北の復興に出かけませんか。

2012年9月の学生ボランティアの様子
写真左：高校生への学習支援　　写真右：牡蠣養殖作業の補助
これまでのボランティアの様子は、ウェブページを参照

期日：2013年3月17日（日）～22日（金）
場所：宮城県気仙沼市
集合場所：京都大学正門前
：JR「一ノ関」駅（一ノ関までは自己負担）

内容：労働ボランティア【学習支援，養殖業補助，環境整備など】20～25名
ボランティアの内容は，派遣学生によって自主的に検討していただきます。
検討会は派遣までに何回か開催しますので，必ず出席してください。
研究ボランティア【期待される調査は，森林資源調査，湿地を含む河川から海までの水質調査など】若干名
フィールド研では，気仙沼の舞根湾で津波後の環境･生物調査を行っています。
研究ボランティアはこの調査活動の範囲の中で行っていただきます。
研究ボランティアを希望する方は，下記の問い合わせ先にご連絡ください。

ボランティア募集対象：京都大学の学部学生・大学院生・研究生等

ボランティア募集期間：2013年1月7日（月）～11日（金）午後5時まで
※この期間にフィールド研に届いた応募は全て受けつけます（募集人員を超えると選考あり）

ボランティア応募方法：フィールド研ウェブページより，ボランティア申込書をダウンロードして，必要事項を記入の上，所属学部･研究科の教務掛に提出してください。申し込み人数が募集人員を超えた場合，申込書に記入された志望動機等をもとに，派遣学生を選考します。

日程：3月17日（日）午前7時　京大正門前からバスで出発
（または3月17日午後6時頃，JR「一ノ関」駅にてバスに合流，「一ノ関」駅までは自己負担）
同日夜，国民宿舎「からくわ荘」（宮城県気仙沼市唐桑町崎浜4-1）着
3月18日（月）～21日（木）ボランティア活動（内容は派遣学生を中心に検討）
3月21日（木）夜　気仙沼市からバスで出発
3月22日（金）昼頃　京大正門前着

同行者：京大教職員2～3名

費用：往復バス代，宿泊費およびボランティア保険料は京都大学が負担。
食費（約1万円）のほか学習支援にかかわる飲食費など（数千円）は本人負担。

服装・持ち物：汚れてもよい作業着など，着替え，雨具，防寒着，リュックサックのような両手が自由になる荷物入れ，洗面具など。長靴は京大が用意。

応募条件：必ず学生教育研究災害傷害保険に加入しておくこと。

問い合わせ先：京都大学フィールド科学教育研究センター
電話：075-753-9395（横山特定准教授）or　753-2268（徳地教授）
メールアドレス：yokoyama.hisashi.2m@kyoto-u.ac.jp
tokuchi@kais.kyoto-u.ac.jp

http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesennuma

（３）派遣後報告会に関して

第４回ボランティア派遣後報告会を以下のように行った。

主催：第４回京大学生ボランティアメンバー

日時：2013 年 5 月 15 日（水）18 時 30 分～20 時

場所：京都大学フィールド科学教育研究センター第 1 会議室（N283）

８．特記事項

第４回東北学生ボランティア線量計（H25.3.17-3.22）放射能測定の結果は以下のとおりであった（カッコ内は線量計番号(A 型、B 型は少数点以下２位まで計測可能)）。

横山 特定准教授(M944)	5μSV（3.17-3.20）
境 技術職員(M9452)	10μSV
吉田/牛田 事務職員(M9447)	11μSV
藤馬（研究ボランティア）(M9451)	6μSV
内海（ 〃 ）(M9450)	10μSV
谷崎（労働ボランティア）(M9449)	7μSV
奥村（ 〃 ）(M9445)	7μSV
中元（ 〃 ）(B5365)	8.74μSV
ﾄﾞｩｱﾝﾗｯﾄ（ 〃 ）(B5433)	8.93μSV
門脇（ 〃 ）(A8406)	8.47μSV
フィールド研事務室（京都）(A8413)	8.38μSV

ボランティア派遣期間中に対照としてフィールド研事務室において測定した線量を明らかに上回ったのは、10 測定中、境技術職員と内海さんの 2 例のみであった。他の測定結果は対照と同レベルか下回ったので、放射能による影響はほとんど認められないと判断される。

１０．謝辞

気仙沼高校では、校長の庄子英利先生をはじめとする数多くの先生方のご理解を得て、学生たちも納得できる成果を挙げることができた。また、今回の活動でも、畠山重篤氏、畠山哲氏をはじめとする水山養殖場の方々には色々とお世話になった。そして、紫市場復興商店街の代表の方、各店舗の方々、気仙沼復興協会の方々、陸前高田復興サポートステーションの代表の方には、震災時の様子やその後の復興状況を説明していただいた。さらには、からくわ荘経営者の佐藤達也氏には、我々の今後の活動の継続に向けたさまざまなご提案をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。